



H30年10月17日(水) 土佐町小中学校 谷内宣夫

『世界がもし100人の村だったら3 - たべもの編』の続き

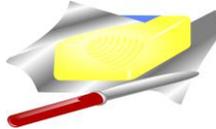
世界がもし100人の村だったら、この村でつくられた穀物を平等に分ければ、すべての人が、1日2800キロカロリーの食事をとることができます。



もし、恵まれた25人が肉や牛乳やバターを食べるのを10%へらしたら、17人の栄養不足の人に穀物をまわすことができます。

もし、アメリカと日本の人がビタミン剤や健康食品に使うお金を食糧不足の国ぐににまわしたら、11人が飢えずにすみます。

そんなのは夢だと、あなたはいうかもしれません。



でも、こうも考えてみてください。



街角のコーヒーチェーンには、フェアトレード(公正貿易)のコーヒーも売っているところがあります。もしもあなたがそれを飲めば、ラテン・アメリカなどの小さな農園の農民はきちんとした食事ができます。

もしもあなたが、草地で育った乳牛のミルクや国産のえさで育った牛の肉を買えば、こんなにたくさんの穀物を輸入しなくてすみます。



また、フランスのように、学校に飲み物の自動販売機をおくことをやめたなら、若い人たちが、ソフトドリンクを飲みすぎて太りすぎることもなくなります。



お金は、人気投票の手段です。

わたしたちは、より好ましい世界からやってくるより好ましいたべものを買うことで、より好ましい世界を少しずつ、でも確実に、力強く引き寄せることができます。



さあ、想像してみてください。

もしもあなたが、もう少したくさんごはんをたべたり、国産の米粉で

パンや洋菓子を焼いたり、肉や卵や牛乳を少しだけへらしたり、工夫して、水道の水でおいしいお茶をいれたとしたら。

もしもあなたが、地元でとれた野菜や魚を買って、自分で料理し、旬のくだものの皮をむき、自分が食べられる分だけとりわけてなるべくのこさないようにしたとしたら。



ごみは土にかえしたとしたら。「ごちそうさま」の向こうどんな世界がひらけるでしょう？



また、こんなことも想像してみてください。

もし、都市に住む人が、野菜を自分たちでつくったらどうなるでしょう。



キューバの首都・ハバナは、そんな菜園都市です。

アメリカの経済封鎖とソ連の崩壊で、たべものが手に入らなくなったキューバでは、ハバナ市民に、土地を貸すことにしました。

人々は中庭を、バルコニーを、屋上を、ゴミ捨て場を耕し、

空き缶にも土を入れて、野菜を育てました。



化学肥料や農薬は、つかいたくても、ありません。

ですから、すべて有機農法です。学校や家庭から出る生ごみも

家畜の餌や肥料にしました。ハバナには 新鮮で、安くて、安全な

たべものが出まわるようになりました。



世界がもし100人の村だったら

都市で耕す人は3人です。でも、来年は6人になります。

世界の都市や町に小さな畑がもつとふえます。

そして再来年は…。 **終わり**



いかがでしたでしょうか？アレルギーのために食べられないのではなく、好き嫌いで好きなものだけ食べて、嫌いな食品は平気で残している子どもがいます。お袋の味でなく、袋(レトルトパック)の味に慣れてしまっているのかもしれません。化学調味料に頼らず、丁寧に出汁からとって調理された給食・野菜や食品の素材の味を生かした給食を食べ残しせず、平らげて給食センターに食缶を返すよう意識しましょう。ご家庭でもお願いいたします。